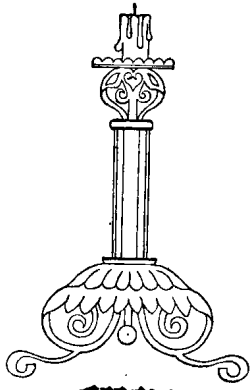
宮原昭夫作品集 5

中原中也全集

5



翻訳

中原中也全集　第5巻
翻譯

1968年4月10日　初版發行
1975年5月10日　8版發行

著者　中原中也
編者　大岡昇平
　　中村稔
　　吉田凞生
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子

發行所　角川書店
東京都千代田區富士見
2の13 Tel (265)7111
振替 東京195208
中光印刷・鈴木製本

0395-571705-0946(1)

目

次

ランボオ詩集《學校時代の詩》
1 Ver erat 一〇
2 天使と子供 一四
3 エルキュルとアケロユス河の戰ひ 一八
4 ジュギュルタ王 二一
5 Tempus erat 二六

ランボオ詩集
初期詩篇
感動 三四
フォーヌの頭 三五
びつくりした奴等 三六
谷間の睡眠者 三九
食器戸棚 四一
わが放浪 四三
蹲踞 四五
坐つた奴等 四八
夕べの辭 五三
教會に來る貧乏人 五四
七才の詩人 五七
盜まれた心 六二
ジャンヌ・マリイの手 六四
やさしい姉妹 六六
最初の聖體拜受 七一
醉ひどれ船 八二
虱捜す女 九〇
母音 九二
四行詩 九四
烏 九五
飾畫篇
靜寂 九八
涙 一〇〇
カシスの川 一〇二
朝の思ひ 一〇四
ミシェルとクリスチイヌ 一〇六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

渇の喜劇　一〇九
恥　一一六
若夫婦　一一八
忍耐　一二〇
永遠　一二三
最も高い塔の歌　一二四
彼女は埃及舞妓か　一二七
幸福　一二八
飢餓の祭り　一三〇
海景　一三三
追加篇
孤兒等のお年玉　一三四
太陽と肉體　一四一
オフェリア　一五〇
首吊人等の踊り　一五三
タルチュッフの懲罰　一五七
海の泡から生れたヴィナス　一五九
ニイナを抑制するものは　一六一
音樂堂にて　一七〇
喜劇・三度の接唇　一七三
物語　一七六
冬の思ひ　一八一
災難　一八三
シーザーの激怒　一八五
キャバレ・エールにて　一八七
花々しきサアルブルックの捷利　一八九
いたづら好きな女
附錄
失はれた毒藥　一九一
後記　一九三
未定稿
ランボオ　二〇〇
ブリュッセル　二〇三
黄金期　二〇六
ソネット

眩　惑　二〇八
ランボオ書簡（エルネスト・ドラエイ宛）　二一〇
ランボオよりヴェルレーヌへ　二一三
ランボオ書簡（テオドル・ド・バンヴィル宛）　二一六

詩

Intermède Ⅱ　カーン　二二〇
アルテミス　ネルヴァル　二二三
セレナード　ネルヴァル　二二四
レ・シダリーズ　ネルヴァル　二二六
黒　點　ネルヴァル　二二八
プロローグ　レッテ　二三〇
Never More　ヴェルレーヌ　二三三
美しき娘の碑銘　ルセギエ　二三五
Ⅳ（忘れた小曲）　ヴェルレーヌ　二三七
Ⅴ（忘れた小曲）　ヴェルレーヌ　二三八
木　馬　ヴェルレーヌ　二四〇
デルフィカ　ネルヴァル　二四三
プチ・テスタマン抄　ヴィヨン　二四五
墓碑銘　ヴィヨン　二五三
去にし代の婦人等の唄　ヴィヨン　二五六
序　曲　ヴェルレーヌ　二五九
自然への供物　ノアイユ　二六〇
未來の現象　マラルメ　二六二
巴　里　コルビエール　二六四
えゝ？　コルビエール　二六六
饒　舌　ボードレール　二六九
暦　ジイド　二七一
死人の踊　ジイド　二九三
天　使　レルモントフ　三〇三
詩人の刻限　カルコ　三〇五
仲　間　カルコ　三〇七
夜　曲　クロス　三一〇
神は、私の生れる時……　リード　三一四
子供の水車　グランムージャン　三一六
誠意の女　ブルモール　三一九
謝肉祭の夜　ラフォルグ　三二二

でぶつちよの子供の歌へる　ラフォルグ　三三四
はかない茶番　ラフォルグ　三三七
サアディの薔薇　ヴルモール　三三九
娘と山鳩　ヴルモール　三三〇
鐘と涙　ヴルモール　三三一
矜恃よ、怨せ！　ヴルモール　三三四
序詩　ボードレール　三三六
祝詞　ボードレール　三三九
散文
トリスタン・コルビエール　ヴェルレーヌ　三四六
アルテュル・ランボオ　ヴェルレーヌ　三五九
ポーヴル・レリアン　ヴェルレーヌ　三六六
マツクス・ヂャコブとの一時間　ルフェーヴル　三七二
ヴェルレーヌ訪問記　レッテ　三八六
オーレリア　ネルヴァル　四〇〇
ルイーズ・ルクレルク　ヴェルレーヌ　四〇四
ボオドレエル　リヴィエール　四〇五
拾遺
ヂェラル・ド・ネルヴァル　四一六
「ゴッホ」序　四一九
解説　四二〇
編註　四五八
年譜　四九八

翻譯

本巻は翻訳篇なので、本文校訂、編註についてこれまでの四巻と若干の原則に変更がある。

一、本文校訂については、明白な誤植・誤字を正し、なるべく原形を保存するという方針は変らない。ただ原文との対照において、行明き行替え、括弧、破線の挿入、句読点の位置など、仏語原文を参照して改めたところがある。つまり誤字・誤植を訂す範囲を拡大したことになる。この中には誤訳である場合もあり得るのだが、文面の達意の見地から、その範囲をなるべくゆるやかに考えた。

二、外国人名の場合は訳者表記のままに保存し、統一を図らないのもこれまで通りである。ただし編者の補足したもの、編註では慣用の表記を用いた。

三、訳者は、省略を示す破線に、原文のままの間隔の広いものを使っている。それらは保存、編者が補う場合は、間隔の詰ったものを用いて、判別に資した。ただし原文も間隔の詰った破線の場合が一例ある。

四、引用詩篇で重複するものは、題名と初行を示し、あとは破線で省略を示した。

五、物名、人名に関する辞典的註は第四巻以降、特に必要を認めた場合のほかは、省いている。

六、テキストに外国語のまま出ているものには関連詩作品に限って訳を補った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

ランボオ詩集

《學校時代の詩》

1 Ver erat

春であつた、オルビリウスは羅馬(ローマ)で病ひに苦しんでゐた
彼は身動きも出來なかつた、無情な教師、彼の劍術は中止されてゐた
その打合ひの音(ね)は、我が耳を響(ひゞ)さなかつた
木刀は、打續く痛みを以つて我が四肢をいためることをやめてゐた。
機(をり)もよし、私は和やかな田園に赴(はし)つた
全てを忘(わす)じ……轉地と懸念のなさとで
柔らかい欣びは研究に倦んじた我が精神を休めるのであつた。
云ふべからざる滿足に充たされ、我が心は無味乾燥の學校を忘れ、彼、教師の
　魅力なき學課を忘れ、私ははるかな野面(のづら)を見遣り、春の大地のおもしろき、
　幻術を觀るに餘念なかつた。
子供の私は、かの田園の逍遙なぞと、洒落(しやれ)ることこそなかつたけれど
小さな我が心臟は、いと氣高(けだか)き渴望に膨らむでゐた
如何なる聖靈が我が昂(たか)ぶれる五感にまで

翼を與へたか私は知らぬが、押默つた歎賞を以て
我が眼は諸々の光景を打眺め、我が胸の裡に
やさしき田園への愛惜は忍び入るのであつた。マニェジイの磁石が或る見えざる力に因つて、音もなくありともわかぬ鉤もて寄する、かの鐵環の如くであつた。

それにしても私の四肢は、我が浮浪の幾歳月に衰へてゐたので、
私は綠色なす川の岸邊に身をば横たへ、
たをやけきそが呟きのまにまにまどろみ、怠惰のかぎりに
鳥らの樂音、風神の息吹きに搖られてゐた。
さて雌鳩らは谷間の空に飛びかよひ
そが白き群は、シイプルの園に、ヴェニュスが摘みし
薫れりし花の冠を咬へてゐた。
雌鳩らは、靜かに飛んで、我が寢そべつてゐる
芝生の方までやつて來て、私のまはりに羽搏いて
私の頭を取圍み、我が双の手を
草花の鎖で以て縛めた。又、顳顬を
薫り佳き桃金孃もて飾り付け、さて輕々と私を空に連れ去つた

彼女らは雲々の間を拔けて、薔薇の葉に
假睡みゐたりし私を運び、風神は、
そが息吹きもてゆるやかに、我がささやかな寢臺をあやした。
鳩ら生れの棲家に到るや
卽ち迅き飛翔もて、高山に懸かるそが宮殿に入るとみるや、
彼女ら私を打棄てて、目覺めた私を置きざりにした。
おお、小鳥らのやさしい塒！……目を射る光は
我が肩のめぐりにひろごり、我が總身はそが聖い光で以て纏はれた。
その光といふのは、影をまじへ、我らが瞳を曇らする
そのやうな光とは凡そ異ひ、
その淸冽な原質は此の世のものではなかつたのだ。
天界の、それがなにかはしらないが或る神明が、
私の胸に充ちて來て大浪のやうにただようた。

やがて鳩らはまたやつて來た、嘴々に
調べ佳き合唱を、指もて指揮するを喜んだ
アポロンのそれに似た、月桂樹編んで造れる冠携へ。
さて鳩らそを我が額に被けるとみるや

空は展かれ、めくるめく我が眼には、
フェビュス親しく雲の上、黄金の雲の上、飛び翔けり舞ふが見られた。
フェビュスは我が上にそが神聖な腕を伸べ、
又頭の上には、天上の炎もて
(汝詩人たるべし！) と記した。　すると我が四肢に
異常の溫暖は昇り來り、そが清澄もて光り耀く
清らの泉は太陽の光に炎え立つた。
扨も鳩ら先刻にせる姿を改め、
美神等合唱隊を作し優しき聲もて歌を唱へば
鳩らそが腕に私を抱きとり、空の方へと連れ去つた
三度 (汝、詩人たるべし！) と呼び、三度我が額を月桂樹もて裝うて、空の方
へと連れ去つた。

千八百六十八年十一月六日
シャルルヴィル公立中學通學生
ランボオ・アルチュル

シャルルヴィルにて、千八百五十四年十月二十日生

2　天使と子供

ながくは待たれ、すみやかに、忘れ去られる新年の
子供等喜ぶ元日の日も、茲に終りを告げてゐた！
熟睡の床に埋もれて、子供は眠る
羽毛しつらへし搖籠に
音の出るそのお舐子は置き去られ、
子供はそれを幸福な夢の裡にて思ひ出す
その母の年玉貰つたあとからは、天國の小父さん達からまた貰ふ。
笑ましげの脣そと開けて、唇を半ば動かし
神樣を呼ぶ心持。枕許には天使立ち、
子供の上に身をかしげ、無辜な心の呟きに耳を傾け、
ほがらかなそれの額の喜びや
その魂の喜びや。南の風のまだ觸れぬ
此の花を褒め讃へたのだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo